

んのように建築士になりたいな。それとも絵を描く人になろうかな。もしかしたら両方になるかもわからない。

私が教えてもらった中で一番むずかしいと思ったことは、くつ下やくつのはき方です。ひもを結ぶのは今でもむずかしいですね。幼稚園はよいところです。私ที่บ้านで遊びたいと思ったおもちゃを借りることができるからです。はじめのうちは書いて借りていただけ、今は書かなくても借りることができます。

私はものを大切にしたり、動物や人々のお世話をすることをなりました。

ぼくは安全ということが解ったから気をつけたいと思います。よ。でも、まだ他にも大切なことがあります。

もし幼稚園に行けなかったら、一日中テレビをみていてつかれてしまったりしたら、外に出られなくなってしまうね。そうしたら、お天気のよい日の気持のいいことなどわからないでしょ

レ デ イ ネ ス と は

うね」

メリーランド州立大学のジュームス・ハイムは、国際幼年教育協会での講演の中で、よい幼稚園のカリキュラムは、大学のカリキュラムと同じ幅広いものであるといっている。

フロリダ州立大学の学校案内をみると、建築学、芸術、生物学、市政学、地理学、歴史学、衛生、人文科学、語学、文学、法学、論理学、数学、音楽、体育、その他のコースがある。これらの分野のすべては、ここにあげた子どもたちの報告の中に示されている。

これらの子どもたちは、幼稚園におけるこの一年間をよいものだったと感じている。彼らは安心して一年生に進級するであろう。なぜなら、学ぶということはおもしろく、また、たいせつであることを知っているからである。

〈大阪キリスト教短期大学・大橋祈恵子訳〉

エ ソ ル イ ー ズ ・ カ ー ペ ン タ ー

レディネスは、紙と鉛筆の用具によって教え、訓練することができるものであろうか。レディネスは、似ていない兎を消すような能力によって測定することのできるものであろうか。オハイオ州、ケント州立大学、幼児教育学助教授、エソルリーズ・カーベントナーは、それを否定し、いくつかの明瞭な理由を挙げている。

何かに対してのレディネスは、いま直行しつつあることだからである。レディネスは多くの因子からなり、多くの方法で測定されなくてはならない。それは外から教えることのできるものではない。それは箱にいれて買うこともできないし、テスト用紙によって発達されることもできない。レディネスは量産によって作られるのではない、個人の状態である。それはまさに生活の一部である。レディネスの状態は、多くの方法でその特徴をあらわす。時には、外にあらわれた現象は単なる表面的なレディネスにすぎないこともある。何かいきいきしたものが内面から輝き出なければならぬ。態度、様子、顔の表情や期待は、子どもが現在の状態を内面的に受けいれて、来るべきものに直面する用意があるかどうかを示すよき徴候である。それはいかなる年齢の子どもでもあっても、共に働く熟練した教師にとつては認め得るような種類の事柄である。それはテストでは知ることのできない認知なのである。

成熟の過程

子どもたちは常にこゝとなつたレディネスの状態にある。彼らは

食事によばれてもぐずぐずする。あるいは彼らは歩くように立たせられてもすぐに床にすわつてしまふ。準備が整っているということを示しているものもあれば、まだ準備ができていないということを示しているものもある。レディネスの状態は、次にくることを練習することによって生じてくるものではなくて、関係のある経験の連続によって養われた成熟の過程によって生ずるものである。子どもは、歩くことによって歩行のためのレディネスができるのではない。あらゆる要素が完全に統合的に働くようになったとき、子どもは歩きはじめ、長期間を要してこの技術を完成していくのである。

多くの人々が、レディネスは一年生になる前の春に子どもたちできねばならないものと考へている。このようなレディネスはシンボルをふくんだ特殊な仕組みによって可能となると考えられている。幼稚園を訪れた人は「いつ、どのようにしてあなたはレディネスをやっているのですか」とたずねる。読むということはそのためのレディネスが機械的にひとつずつ行なわれなくてはな

らないような、そんなに組織化された過程であろうか。幼稚園の子どもたちが学校の読書と、楽しみのための読書と二つの種類の読書があると思っているのは不思議ではない。多くの地域で、読むためのレディネスを教えることを宣伝している夏期幼稚園すらあるのだ！

いま、必要とされる能力

ナースリースクールや幼稚園は、子どもがいま必要としているものために備えられている。そしてどんな経験でも後の経験の基礎となっているように、それは一年生のためにも役に立つであろう。レディネスは、環境や人間や事物に熟練することから生じてくるものである。それはあたりまえのものを越え、利己心を越えたいという願望を促し、身体の成熟、社会的能力、感情の統制や知的機敏さに達しようとする願望を促進するものである。読み方のレディネスは他のことと同じように、長い期間にわたるこのような経験によって培われる。ナースリースクールや幼稚園で、子どもは他人のいうことに耳を傾け、順番を待ち、批判的に思考し、責任を負うことを教えられている。子どもは、いま彼の属しているグループのメンバーとして貢献するためにこのような能力を必要としているのである。彼は、「一年生の先生が期待しているから」このようなやり方でふるまうように教えられているのではない。

就学前のグループ生活は、自己を満足に展開させ、現在と将来のためのレディネスを作りあげていくことを可能にするものである。それは探索的な環境であって過熱した準備の環境ではない。多くの学校において、読むことは、ほかのすべてのことは附随的に取扱われるほど重大な事柄となっている。読み方は、たいくつな経験の表からはじまる。それは同様に単調かつ制限された経験から生まれたものである。子どもたちはそれにもかかわらず熱心であるが、しばしばおびえており、親は自分の子どもがどのグループにいられるかを心配し、その上、しつけの問題がたえず起こってきて、誰もが読むことがもつとスムーズに行なわれるために、子どもたちにどのようにすればもつとよく準備させることができただろうかと疑問に思っている。その結果幼稚園や教育行政に目が向けられ、またある人々は幼稚園で「あまりに遊びすぎる」ことに問題があると思う。もし子どもたちが遊びまわっている学習はできない。学習し勉強するためには、すわって紙に何か書き静かにしていなくてはならないのである！ しばしば「解決」として幼稚園にレディネスの教材を購入することとなる。

レディネスの教材は簡単に注文でき、それは紙でありすべての子どもを同じように教えていく。読み方は、ここでは各種の段階をひとつずつ切りはなし、その段階で作用し得るような冷たい過程としてみられている。それは左から右へ目を動かす学習のため

の印刷された紙と図表なのである（それらの多くはレディネステストにもとずいたものではあるが）。しかし子どもは右から左へ、上から下へと楽しく生活をつつめる。子どもは自分の環境をよくとるためにもっともよい方法なのである。子どもたちは、一列に並んでいるものの中からいちばん大きな木を選び出すことには骨を折るが、皿にあるいちばん大きな菓子をみつけるのはむずかしいことではない。

プログラムは購入できるか

訓練を受けていない教師を雇った幼稚園では、不幸なことに市販のプログラムを購入することによって、レディネスの問題が解決できると思っている。用具を評価するための資格をほとんど持たない人たちの手にわたると、しばしば其の使用方法を知らなかつたりしてその結果、用具は彼らの手でこわされるか、或いは子どもたちに与えられ、子どもたちは退屈のため無気力となり、それを拒絶することもなくなってしまうほどうんざりする。それに抗議する熱心な声は、このような用具をしばしば強要せられた、よく訓練された創造的な教師から起こっている。これはレディネスのための用具への抗議のみならず、児童発達の分野において得られたすべてのものを無視することへの抗議である。

就学前数年間、子どもたちは多くの材料や多くの変化にとんだ考えをもつて活動している。彼らは自分たちの環境を操作するこ

とを学び、自分自身や他人の価値を感じとることを学ぶのである。彼らは話をし、自由に動き、感じ、聴き、見ることによつて疑問に答えることを知っていくのである。彼らは書物がすばらしい知識と楽しみの源であることを学ぶ。彼らはいろいろの考え方にとりくみ、そしてお互いに相違していることを認めて、そのことを受けいれることができるのである。彼らは同じ結論に達するのには多くの道があることを学ぶ。彼らは新鮮な発見をし、そして愉快な、はなやかな、想像的になかつすこぶる描写的な言葉を使用する。彼らは必要と感じたとき数え分類する。彼ら自身よつて書かれたシンボルは、彼らには通用するがおとなにとつては理解できない。彼らは記号である文字を一定のものに組み合わせると、何かを意味するものであることに気がつくが、しかしこの段階では、これがコミュニケーションの方法であるということを知るだけで十分である。幼稚園の空気の中での数年間にわたる生活は、探究性の発達が行なわれるための幅広い経験と機会の時である。退屈している状態は、たしかに読み方のレディネスを示しているのではなくて、むしろ沈滞したプログラムを示すものである。よいプログラムにおいては、子どもたちが後に読むことを意味あるものとする技能そのものを発達させるのである。このような技能は、時計の時間のようにこまぎれにされた学習の片々に分離されるのではなくて、活動的に参加する環境から生ずるのであ

る。

教師がレディネスとは紙と鉛筆の技術によって教えられ訓練され得ると考えているならば、子どもは公然と反逆して当然であろうし、また、多くの子どもたちは反逆している。他のうさぎと異なうさぎを消し、左側のネズミを右側の穴に入れるというような能力によって、次の楽しい生活へと移って行くレディネスが評価されている子どもに対して専門家として涙せずにいられない。

準備のための時間は短い、到達するための時間は長い。レディネスは欲すること、ねばならぬこととの間のどこかにあるものである。それは成長、人格、想像、自己実現の実質的内容である。レディネスにとり組もう。時にはそれをとり出し、調べ、ためしてみよう。しかし目的もなくそれをふりまわすことはやめよう。たしかに今日の子どもは、前進的なよりよい資格をそなえた教師から、よりよき何ものかを与えられるべきなのである。

〈大阪キリスト教短期大学・大橋祈恵子訳〉

§§

§§

ごっこ遊びは、子どもにとって「自然な」ものである。実際、この二つのものは、同じことであると思う。それは幼児のあたりまえの活動である。——下準備もせず、何かの経験を（事実であろうが、空想であろうが）自発的に再現し、その中で子どもは猫になったり、汽車、お母さん、赤ちゃん、消防夫、宇宙人、イン

ディアンなどになって、声をまねたり、それらしい行動をしたりする。ふつう、それは子どもがよく知っている人やものと密接に関係しており、子どもは、ある時間——二分間とか、三時間、一週間——その人になるのである。このような行動は、家庭のおとなたちにはくだらないものとみえるかもしれないし、カリキュラムが、その日にトムがなりたいと思っている小馬と合わないときには、教師にとってはじゃまなものであるかもしれない。しかし、多くの重要なこと社会的発達、情緒的発達、興味、知識的背景や概念など——が、そこで学習されている。

ほんとうのごっこ遊びは、創造的であり、独創であり、即座的である。この遊びによって、子どもは感情や、願望や、理解をこぼや行動で表現する。このような再現により、子どもは、この世界に対する安定と信頼を学ぶのである。ときには、遊びは事実に対する子どもの誤解や混乱を示す。ときには、遊びは身体的エネルギーや、感情的緊張の建設的な解消に役立つ。ときには、このような解消が子どもの中に反社会的で有害な観念を固立したりしないまでも、刺激過剰になったり、身体的危険を招いたりして、解消するのがよいかどうか、疑問になる場合もある。このような疑念が生じるときには、理解あるおとなの指導を必要とするときなのである。——エステル・B・スタークス「ごっこ遊び」子供の教育、一九六〇年十二月号、一六三—一六四頁 (T)